

鈴木あゆ

映画『怪物の木こり』における
サイコパスが邦画に登場する社会的背景と意義

要旨

「サイコパス」は何かと尋ねられて正確に答えることができる人はどれだけいるだろうか。世間一般でサイコパスは人を殺すことをためらわないシリアルキラーをイメージする人も多だろう。しかし、サイコパスの学術的な定義は「他者に共感することが難しく、自己中心的な行動をとる人物」のことを指す。こうした認識の違いが出る理由は、昨今サイコパスを題材とした小説や映画などの作品が多数現れ、「サイコパスへの偏見」を含めた社会的な関心を集めていることも一因だと考えられる。

本研究では、サイコパスに関する作品が「社会構造を象徴している」との問題意識に基づき、2023年に公開された映画『怪物の木こり』を研究対象とし、複数の登場人物のサイコパス的な発言や行動を抜き出して分析した。そこからサイコパスの共通点と相違点、また彼らが就いている職業との関連性について論じた。

サイコパスは一見一般社会と隔絶した特別な存在に見えるが、実際は身近にいる人々にもサイコパス的な傾向があり、サイコパスの問題は社会構造と結びつきも深い。こうした点も含めて検討した結果、映画『怪物の木こり』という作品の背後には、サイコパス問題をめぐる様々な点について警鐘を鳴らして社会に注意喚起を行う意図があることがわかった。サイコパスと社会で共存していくためには、彼らの特性を活かしつつ、リスクを抑えるための対策やケアや求められていると考えられる。